

ちぎりけん心ぞながきたなばたのきてはうちふすとこなつのはな

ぢんのいはほをたて、くろばうを土にて、なでしこをうへたるところに、

代々をへているもかはらぬなでしこもけふのため、にそにほひましける

此歌共は兼盛能宣ぞつかうまつり侍ける、これを見る人々、おのがひきく心々にいひつくる
とて、左の人、

かちわたりけふぞまつべき天の川つねよりことにみぎはをとれば
右の人

天の川みぎはことなくまさるかないかにまつらんかさ、ぎのはし
此あそびいと興ありてこそ侍れ

〔前大納言公任卿集〕七月七日藤つばの撫子あはせに、人讀半都満字計たりける、○人以下
恐有誤脱

たなばたの秋のよをへて撫子の花をぞけふはあはせつとみよ

〔中務集〕三條の女御なでしこ合し給に

あしたづのおれるはまべのなでしこは千世をや色も引はそふらん

〔朱雀院女郎花合〕亭子院の御多宇○おりぬさせ給ふて、またのとしきさきとみかどのせさせ給
ふ、をみなへし合なり、

一番 左

草がれの秋過ぬべきをみなへしにほひゆへにやまづみえぬらん

右

あらがねの土の下にて秋まちてけふのうらでにあふをみなへし

二番 左

女郎花合